

第 33 回 「武家茶道四百年の継承」を聴く

平成 22 年 11 月第 51 回日本肺癌学会総会が広島大学大学院 医歯薬学総合研究科病理学 井内康輝会長のもと広島市で開催されたが、会期中には医学系の学術集会における企画としては珍しい茶道上田宗箇流第 16 代家元・上田宗岡氏による特別講演「武家茶道四百年の継承」があった。

武家茶道は、江戸時代には大名茶ともいわれるほど大抵は大名自身が家元に相当し、実務は茶道師範が担うというのが普通であった。武家茶道には多くの流派が生まれたが、明治維新の廃藩置県による武家社会の崩壊とともに多くの流派が消滅したという。

特別講演では、わが国における抹茶の歴史的内容からはじまり、戦国時代武将たちの関わりや、芸州浅野氏の広島城内に家老として屋敷を賜っていた上田氏が明治維新の激動期や広島原爆惨禍を超えて現在まで武家茶道を継承してきたことなどが話された。

上田宗箇流は上田流ともいうが、上田宗箇(以下敬称略)(1563 年-1650 年)がその武家茶道流派の初代である。

茶の湯の歴史をみると、わが国の奈良時代に当たる 760 年頃に唐の陸羽が中国の茶の歴史・器具・製法・産地などを記載した「茶経」を著しており、平安時代になってから 805 年僧最澄が唐より茶の実を持ち帰ったとされている。抹茶を嗜むことは中国で唐代から宋代にかけて行われていたが、それをわが国にもたらしたのは平安・鎌倉時代の僧で日本臨済宗の開祖栄西(1141 年-1215 年)である。1191 年に帰国した栄西は抹茶に関する「喫茶養生記」を著わし、上巻には茶の作法・製法・身体を壮健にするなどの効用、下巻には飲水(糖尿病)・中風・不食・瘡(切傷やできもの)・脚気などの五病に対する茶の効用等を述べている。1214 年には「茶徳を誉むる所の書」を著した。これらの書物はそれぞれ時の鎌倉幕府の初代将軍源頼朝(在位期間 1147 年-1199 年)と三代将軍実朝(在位期間 1203 年-1219 年)に献上され

た。抹茶法(茶の湯)は坐禅の眠気さましのために利用されるとともに、武家社金に広がり、のちの南北朝時代には一般社会にも広がった。

13世紀は、鎌倉時代には武家が勃興し、それ以前の僧職や貴族階級の間に限られていた言語文から文章語というのが発達した時代といわれる。ここでいう文章とは「単に文字に書かれた言語というだけでなく、その表現力が、叙事・叙情のみでなく、広く抽象的もしくは形而上的なことにもわたり得るといふ、多目的な能力をもった言語」である(司馬遼太郎:「この国のかたち(二)」,文芸春秋社,1995年)。現在も広く知られている13世紀の文章には、悟りの真髓をのべた正法眼蔵(ショウボウゲンゾウ, 道元)、日本で初めての史論書とされる愚管抄(慈円)、親鸞の談話を唯円が解りやすい文章にした歎異抄、法華経を基盤とした立正安国論等の社会改革書(日蓮)、軍記物として平家物語、など数多く、その時代の文章語の著しい発達を裏付けている。

15世紀頃になると、中国から移入された抹茶法は中国一辺倒であったことから見直されはじめ、茶の湯に日本人の心の問題を取り入れようとした人物がいた。彼は、完璧な美よりも一寸ひかえた方がいわくの美があると考えた。例えば、一点の曇りもない夜空の月よりも雲がわずかにあるような、さらに月も少し欠けていた方が美しく感じられるし、茶碗も青磁などの完璧なものよりも少しくすんだ茶碗で嗜む方がおいしい、などということである。その人物村田珠光(1423年-1502年)は、簡素静寂の境地のわび茶の祖といわれ、人を招いて茶の湯によってもてなすため、自他がともに認識される最短距離である1メートル半程度の空間のなかで、花入れの花も映えるように土壁にした広さ四畳半の茶室を造った。茶道や俳諧の理念のひとつの「わび」は、飾りやおごりを捨てたひっそりとした味わいをいい、「さび」は閑寂の趣を意味する(三省堂大辞林)。村田珠光の門人武野紹鷗(1502年-1555年)は、わび茶をさらに深化させた。

千利休(1522年-1591年)がわび茶を完成させたといわれる。武野紹鷗の門人のひとり利休はわび茶の精神を突き詰め、名物を尊ぶ様なそれまでの価値観を否定し、装飾性の乏しい、どこにでもあるような茶器を用い、茶室も最小の空間の中に広く静寂な自然を感じさせるように、それまでの四畳半の広さから三畳、さらに二畳とした。

利休は織田信長(1534年-1582年)ののち豊臣秀吉(1537年-1598年)に仕えて重用され、茶人として最高峰を極めるに至ったが、秀吉の勘気に触れ賜死(切腹)した。利休の死罪理由はいくつか挙げられているが、ひとつには大徳寺山門改修に当たって利休自身の雪駄履きの

木像が楼門の二階に据えられたため、その下を秀吉が通ることになり無礼だというのである。秀吉は、天下を取るまでと取った後とはかなり人物が変わり、特に晩年はひどく残忍な所業をしたことが史実として小説などに書かれている。

利休の茶道弟子は大半が戦国武士であり、彼らにとっては二畳の茶室は狭苦しく窮屈であった。武士の弟子はより広い茶室を希望していたが、利休は妥協することなく変えることはなかった。利休門人の七哲のひとり古田織部(1544年-1615年)は利休の没後茶室を三畳前後のゆとりのある茶室を造るとともに、茶碗などもヨーロッパの影響を受けたような色彩のものなど新しい感覚を取り入れた。講演のなかで織部杳型茶碗や伊賀茶入銘「生爪」などが披露された。織田信長、豊臣秀吉に仕えた古田織部は、関ヶ原の戦いの3年後に開府された徳川幕府のもとで家康から1万石を与えられ、茶の湯の名人として諸大名がその門人となった。しかし古田織部もまた大阪冬の陣ののち豊臣に内通したとして家康によって殺された。

武家茶道上田流の流祖上田重安(剃髪後は上田宗箇)(1563年-1650年)は古田織部より20歳ほど若いその門下のひとりで、秀吉に仕えた武勇で知られる武将であった。16代家元・上田宗岡氏によると、上田重安は豊臣政権5奉行筆頭での浅野長政と仲がよかった。長政は石田三成と犬猿の仲である一方では5大老筆頭の徳川家康と昵懇であったという。重安は秀吉の家臣として武功を重ね、豊臣姓を賜ったほどで、関ヶ原の戦いでは西軍に属し敗戦した。隠居・剃髪したのち名を宗箇と改め、請われて蜂須賀家政の客将として徳島に住んだ。その後紀州藩主浅野幸長(長政の長子)の家臣となって1万石を与えられ、徳川家康にも許されて、還俗した大阪の役では徳川方の武将として出陣し戦功をあげた。上田宗箇は茶道のほか造園にも巧みで、徳島では家政の依頼で徳島城表御殿庭園を、紀州和歌山では西の丸庭園や粉河寺庭園をそれぞれ作庭している。浅野長政は江戸幕府成立後には家康に近侍し江戸に移ってが、家督幸長には子がなく長政の二男長晟がそのあとを継いだ。1619年浅野家の広島藩への加増移封に従って上田宗箇も芸州に移り、佐伯郡小方に1万2千石を与えられた。

江戸時代の上田宗箇は茶道と造園を趣味として生涯を送った。茶碗もみずから焼き、茶入れや花入れも自分で作った。講演では宗箇自作の「さても」という銘の御庭焼茶碗や、花入れや茶入れなどが披露された。宗箇の茶の湯の弟子のひとりの徳川二代将軍秀忠は大変な茶好きで、将軍在位のとくに茶室へのお成りの行程を従来とは異なった様式に変えたほどである。上田宗箇が浅野家に従って芸州広島藩に移って以来上田家は12代にわたって広島城内に屋敷があった。

明治維新によって諸国大名には大きな異変が起こり、城を出なければならぬ事態が生じた。二十五万石以上の国持大名や十万石以上の城持ち大名は東京に集まり住むことになったが、一万石程度の陣屋大名などは国元に住むことを許された。維新後の第二の危機は被爆であったが、上田家は被爆の時期から十数年前に現在の屋敷に移り住んだため被爆を免れたということである。江戸時代の大名には城外に上屋敷や下屋敷といったような別邸があったが、それらは城からそれほど遠いところにはなかったと思われ、昭和時代に移り住んだという現在の屋敷は広島市内のどのあたりであろうか。

明治以降多くの武家茶道の流派が消滅したなかで、上田宗箇流が桃山時代以来 400 年に亘って継承できたのはこれら二つの事実によることは間違いない。

上田宗箇流第 16 代家元・上田宗問氏による特別講演を拝聴して日本の茶の湯の歴史を多少とも知ることができたが、「わび」や「さび」について理解するには頭の中でまだ靄がかかっているような状態であることに変わりはない。茶の湯に限らず日本人が何故そのようなことに、あるいはそのような境地に惹かれるのか今後も楽しみながら考えてみたい。